ヒュームの人種差別主義の哲学的基礎

澤田和範

はじめに

二〇二〇年五月二五日、ミネアポリスでアフリカ系アメリカ人のジョージ・フロイドが白人警官に殺害された事件。この事件をきっかけに再燃したBlack Lives Matter(BLM)運動はSNSなどを通じて世界的な規模に拡大していった。そんななか、とりわけ哲学や思想史の研究者たちにとって大きなニュースが、九月一五日、エディンバラ大学からもたらされた。同大学の「平等と多様性委員会」および「人種平等と反人種差別分科会」は、ひと夏をかけた調査のうえで、「デイヴィッド・ヒューム・タワー」として知られた学内でもっとも高い建物を、当面のあいだ「40ジョージ・スクエア」に改称することを決定したのである。その理由は次のように公表されている。

この暫定的な決定が取られたのは、人種の問題についてのコメントが、当時としては珍しくなかったとはいえ、今日の苦しみの原因となったのは間違いないような、そういう一八世紀の哲学者の名を冠した建物を使用することを学生たちに求める、ということにまつわる繊細な問題(sensitivities)のためである(1)。

ヒュームが人種差別主義者だったということについては、否定的意見はほぼ存在しない。何か議論があり得るとすれば、むしろ我々がこの事実についてどう考えるべきかという問題だろう。本論の課題は、ヒュームの人種差別主義思想について、限られた範囲ではあるが、当時の時代状況や思想的背景も含めた具体的な内容を検討し、それを踏まえて何か一定の教訓を得ようというものである。

1　ヒュームの人種差別発言

ヒュームの著作に人種差別主義的な主張が含まれていることが、これまで知られていなかったわけではない。しかし、それが今回はヒュームの出身大学のシンボルの名称を変更するという大きな騒ぎにまで結びついた。これは、BLM運動の一部となって議論を呼んでいる歴史的記念物の撤去や引き倒しが、エディンバラ大学へも波及したものと見られている。実際、二〇二〇年六月には奴隷貿易に関わっていたことが知られるエドワード・コルストンの彫像がブリストル湾に投棄されていた。次はヒュームだというわけである。エディンバラ大学の博士課程学生エリザベス・ランドはネット上で名称変更を求めるキャンペーンを張り、同大学が名称の変更を決めた時点で一八〇〇筆ほどの署名が集まっていた(Learmonth 2020)。キャンペーンの説明のなかで、彼女は「デイヴィッド・ヒュームはここで繰り返す価値のない人種差別的な罵倒語を記した」と訴えている(2)。しかし、この問題を適切に理解するには、どのような文脈で具体的に何が言われているかを確認する必要があるだろう。内容の詳細に分け入る検討は追々行うとして、まずはヒューム自身の言葉とその影響をごく簡単に紹介しよう。

問題とされているのは、『道徳・政治・文学論集』に収められた「国民性について(Of National Characters)」というエッセイの脚注の一つである。このエッセイは一七四八年に出版されたが、問題の脚注は一七五三―五四年版で付け加えられた。全文を引こう(3)。

私[ヒューム]はネグロと、そして一般に人間の他のすべての種族(というのは、四つか五つの異なった種類があるので)は生まれつき(naturally)白人に劣っていると思いがちである(apt to suspect)。白以外の肌の色(complexion)を持つ文明化された国民はけっして存在しなかったし、卓越した個人でさえ行動においても思索においても存在しなかった。彼らのあいだには創意工夫に富んだ生産品も見られないし、技芸も学問もない。他方で、もっとも未開の野蛮な白人たち、たとえば古代のゲルマン人や現代のタタール人たちでも、勇敢さ、統治の形態、あるいは他の何らかの点で、彼らについて何かしら卓越したものをやはり持っているものだ。かくも斉一的で恒常的な違いは、もし自然が人間たちのこうした系統のあいだに根源的な区別を設けていないとすれば、かくも多くの国々や時代に渡って起こることは、あり得なかったであろう。我が国の植民地は言うまでもなく、ネグロの奴隷たちは全ヨーロッパに散らばっているが、これまで創意工夫の兆しを示した者は誰もいない。対して、教育を受けていない身分の卑しい人々であれば、我々に混じれば立ち上がって、あらゆる職業で頭角を表すようになるであろう。ジャマイカでは、たしかに一人のネグロが才能と教養を持つ人物として、人々の口の端に上っている。

しかし、彼が称賛されているのは、少数の言葉をはっきり話すオウムのように、わずかばかりの達成のためだということのほうがありそうである。(NC 20n10)(4)

ヒュームは一七七七年版において問題の脚注の最初の部分を変更している。削除された語には取り消し線を引き、付加された語には傍点を打って、その変更点を示そう。

私[ヒューム]はネグロと、そして一般に人間の他のすべての種族[というのは、四つか五つの異なった種類があるのだが]は生まれつき白人に劣っていると疑いがちである。白以外のその肌の色を持つ文明化された国民はけっしてこれまでほとんど存在しなかったし、卓越した個人でさえ行動においても思索においても存在しなかった。

この変更はヒュームの主張をわずかに弱める一方で、そのターゲットを黒人のみに絞ることになった。しかし、むしろ重要なのは、ヒュームが修正を加えながらも人種差別的な脚注を維持し続けたことだろう(Immerwahr 1992)(5)。ヒュームの修正を知らなかったリチャード・ポプキンが一時期そう示唆していたように、この脚注がヒュームの「カジュアルな付け足し」に過ぎなかったとは、もはや考えるわけにいかないのである(Popkin 1993b, p. 266)。

たった一つの脚注に現れたヒュームの発言は、とくに肌の色と劣等性を結びつけた点で、人種差別主義の歴史に大きな爪痕を残した。この点については、ウィンスロップ・ジョーダンが当時の言説を広範に調査したうえで、ヒュームは「誰よりも大胆にそのことを述べた」と評している(Jordan 2012, p. 253)。その影響については、カントの場合がおそらくもっとも有名だろう(e.g. Rattansi 2020, pp. 13-14)。カントは、言うまでもなくヒュームと同じく一八世紀の啓蒙思想家の代表格であるが、一七六四年の前批判期の著作において明示的にヒュームの発言を是認し、それに加えて、ある黒人の事例を引いて彼自身のコメントを付した――「要するに、こいつは頭の先から足の先まで黒かったのであり、それは彼の言ったことが愚かであった明らかな証拠となる」(カント 2000, pp. 381-382)。

他の著作への影響については、ポプキンの調査が参考になる(Popkin 1993b, pp. 260-263)。近世懐疑主義の優れた研究でも知られるポプキンは、一九七四年の論文「近代的人種差別主義の哲学的基礎」(Popkin 1993a)を皮切りに数編の論文を執筆し、ヒュームと人種差別主義についての議論を先導した。ポプキンの「ヒュームの人種差別主義」によれば、『道徳・政治・文学論集』のフランス語訳者は、ヒュームの脚注に、さらに自らの脚注を加えて次のような裏書きを与えている。

私はヒューム氏の見解を確証する経験を持ったことがある。私は気がついたのだが、もっとも賢くてやる気に満ちたネグロの若者たちは、技芸や学問に取り組ませてみると、最初は急速に進歩するけれども、一定の期間の後には、彼らの思考は混乱し、彼らをさらに先へ進ませようと想像し得るかぎりの努力を払っても無駄なのである(6)。

また、ジャマイカの植民地経営者であったエドワード・ロングも、著書『ジャマイカの歴史』(一七七四年)において黒人は劣った種族であるという彼自身の見解を提示しながら、ヒュームをその主張の権威として引き合いに出している。さらに、ヒュームの人種差別発言はアメリカの奴隷制擁護論にも影響した(7)。『習慣と正しい理性の賛成による個人奴隷所有制の確立――その問題の狂信的で熱狂的な著者たちによる悲観的で非現実的な夢想への完全な解答として』(一七七三年)という大層なタイトルの匿名の著作は、やはりヒュームを人種差別主義の権威として持ち出している。リチャード・ニスベットの『聖書が禁じない奴隷制』(一七七三年)でも同様である。

ポプキンが強調しているように、ヒュームの発言が当時の人種差別主義に大きな思想的影響を与えたという点は重要である。しかし同時に、ヒュームの主張がとりわけ大きな実際的な影響を与えたかという点についてはやや疑問が残る。人種差別の歴史を専門とするジョージ・フレドリクソンによれば、ヒュームの主張したような説は、「一八世紀終わりから一九世紀はじめに生じた奴隷と人種に関する政策上の諸問題とは基本的に関係がなかった」(Fredrickson 2002, p. 63)。たとえば、ロングの著作は、むしろ奴隷制反対論に多くの攻撃材料を提供することになったのだという。とはいえ、少なくともヒュームの発言がきわめて差別的な思想を含んでいることに疑いはない。本論で議論したいのは次の問題である。一つの脚注に現れたこの発言は、彼の哲学的主張の一部なのだろうか、それとも、たまたま哲学者でもあったヒュームという当時の人間から発せられただけのものなのだろうか――。

一般向けの哲学書を数多く手掛け、高い評価を受けているジュリアン・バジーニは、エディンバラ大学の騒動を受けて『プロスペクト』に寄稿した論評において、一つの「パラドクス」と彼が呼ぶものを持ち出している。いったいヒュームが人種差別主義者でありながら、同時にもっとも偉大な哲学者の一人であるということは可能なのか。バジーニの答えは旗幟鮮明である。

この見かけ上の矛盾を解決する道がある。もし我々がヒュームの思想についてもっとも称賛しているものは何かと尋ねさえすれば、彼の人種差別によって何も傷つきはしないということが分かるのだ。実際、一つの脚注がなかったとすれば、彼はイタリアから先へ旅をしたことがなかった一八世紀の白人が能う限りで啓蒙されていた、と我々は見なしていただろう。(Baggini 2020)

バジーニはヒュームの哲学を免責しようとしている。ヒュー

ムが今日の名声を勝ち得ているのは、もちろん彼の人種差別思想のゆえではない。我々はヒュームの人種差別思想に慣り、それを厳しく批判しながら、ヒューム哲学の優れた部分を正当に評価することもできるはずである。

たしかにヒューム個人が差別主義者であるという事実だけから、彼の哲学も差別的だということは帰結しない。そのような議論は乱暴である。しかし同時に、ヒュームの人種差別主義はヒューム哲学の評価から安全に分離可能だというバジーニの考えは、いささか素朴に過ぎるかもしれない。実際、こうした切断処置が簡単に行えるという想定は、ヒュームが表明した人種差別思想の問題の所在を適切に評価することを妨げる。そうなれば、ヒューム哲学の限界や難点に最初から目をつぶることによって、かえってその評価を空虚なものへと落としてしまいかねない。そして、いずれにせよ、ヒュームの人種差別発言はしばしば示唆されるほど単純な内容ではないのである。

次節以降で議論に入る前に、いま述べた事情の複雑さという点について、ありきたりな注意を繰り返しておきたい。それは、過去の人々の言行を現代の観点から判断する際には慎重であるべきだという注意である。そもそも人間の種類を表す「人種(race)」は、近代以前には存在しなかった概念である。ヒューム自身は"race"という語を「人種」の意味では用いていない。彼が"race"という語を用いるのは馬の血統を指すためであり、これは伝統的な用法に従うものである(NC 34)。さらに、人間がいくつかの種類に分かれるという考えは、かなり長いあいだ疑問の余地のない事実だと思われてきた。フレドリクソンは「人種差別主義(racism)という概念が現れたのは、人種という概念、あるいは少なくともその適用が問題視され始めたときだったと言えるかもしれない」と論じる。この用語はせいぜい二〇世紀初頭に遡ることができるだけなのである。しかも、当初「人種差別主義」として問題にされたのは「白人」内部での不当な差異化や序列化であった(Fredrickson 2002, p. 156)。つまり、ヒュームの時代には、現代の我々が「人種差別主義」をそのなかに位置づけるような諸概念のネットワークは存在していなかった。そうだとすれば、当時の人々がヒュームの問題の発言を現代の我々のような仕方で人種差別発言として理解することは、ほとんど不可能なことだったはずである。もっとも、このことは、以下で見るように、ヒュームの発言に人種差別的な問題がなかったということを含意するわけではないのだが(8)。

2 「国民性について」とその歴史・思想的背景

ヒュームの発言の背景にある歴史的・思想的事情に踏み込むことにしよう。まず理解しておく必要があるのは、ヒュームの人種差別主義はけっして啓蒙主義に乗り遅れた思想ではなく、ある意味で啓蒙主義の産物だということである。

ここでも主としてポプキンの論述が参考になるだろう(Popkin 1993b; cf. Fredrickson 2002, Chs. 1 & 2)。アメリカ大陸

がヨーロッパ人に発見され、ついでアフリカ黒人の奴隷制が開始されると、「インディアン」や「ネグロ」に対する白人の優越を説明する理論が社会的に求められるようになった。当初、そうした理論は、ヨーロッパ人が文明化された一方で、ネイティブ・アメリカンや黒人が未開な状態に留まっているという現状の差異を、『創世記』のハムとカナンの呪いのような超自然的要因が(自然的要因とともに)特定の人々に加えられたことによって生じたものだと説明した。そのような理論は、人類はすべて神によって創造された最初の人間アダムの子孫であり、ノアの大洪水を生き延びた人々の子孫だという聖書の記述を前提していた。言い換えると、こうした理論による人種間の差異の合理化は、聖書の記述に基づいた人類の単一発生説(monogenetic theory)という形を取っていたのである。

しかし、一七世紀後半から高まってきた啓蒙思想の波が本格的に押し寄せると、人間の種類という主題にも、神学的な説明ではなく「科学的」説明が要求されるようになった。当時、人間のさまざまな種類の原因論、ひいては白人の優越に関する説明として有力だったのが、モンテスキューやビュフォンの風土理論(climate theory)である(Garrett & Sebastiani 2017, pp. 37-38)。ヒュームのエッセイとは出版年が前後するが、ビュフォンが『博物誌』第三巻(一七四九年)で展開した説明はかなり詳細で興味深い。その結論部分では次のように言われている。

それゆえ、すべての事情が一致して次のことを証明している。すなわち、人類は互いに本質的に異なる種から構成されるのではなく、反対に、元々はただ一つの種だったのであり、それが数を増やして地球の全表面に広がった後に、気候、食物、生活様式、疫病、そして多かれ少なかれお互いに類似した個々人の混交といった影響によって、多くの変化を経験したのである。(Buffon 1749, pp. 529-530)

ビュフォンは、単一発生説に従ったうえで、白人以外の人種はもともと白人だったものが数世代をかけて劣化した結果であるという「劣化論(degenerative theory)」を採用する。逆に言えば、「もっとも穏やかな気候は[ヨーロッパの位置する]四〇から五〇度の間である。その場所で人間の形はもっとも完成されている。また、その場所で我々は本物の自然な人間の色の観念を形成しなければならない」(Buffon 1749, p. 528)。これは現在から見れば鼻白むような自民族中心主義かもしれないが、ポプキンが注意するように、このような風土理論の支持者たちの「劣化論」は、他の人種たちの現状も、彼らの生育環境がヨーロッパのようになれば、多くの世代を重ねるうちに改善され得るだろうという考えを含んでいた(Popkin 1993b, p. 252)。

さて、問題の脚注が加えられたヒュームの「国民性について」は、こうした歴史的・思想的事情を背景として執筆され

たものである。とりわけ、モンテスキューが同年に出版したばかりの『法の精神』の風土理論に対抗するような理論を鮮やかに提示していることがよく知られている(9)。ヒュームは、このエッセイの冒頭で、各国民が一般的に「特有の生活様式(peculiar set of manners)」と「特有の性質(peculiar qualities)」を持っていることを指摘したうえで、そうした「国民性(national character)」の原因は「精神的(moral)」なものか、それとも「身体的(physical)」なものか、ということを問題にする。当時の用法からすれば当然なのだが、「精神的」原因の外延がおもに社会政治的なものである点に注意しよう。

精神的原因とは、動機や理由として精神(the mind)に働きかけることに適し、特定の生活様式を我々に習慣づけるような、すべての事情を意味している。この種のものに含まれるのは、統治形態の本性、公事の諸変革、人々の生活の豊かさや貧しさ、その国の隣国に関する情勢といったような諸状況である。身体的原因とは、体の調子や体質(tone and habit of the body)を変えることによって、また、特有の肌の色(particular complexion)を与えることによって、[…]気づかれない仕方で国民の気風に作用すると想定されている気候や風土の性質のことである。(NC 1-2)

どちらが国民性の違いの本当の原因なのか。ヒュームの答えは明瞭である。「国民性が精神的諸原因に大いに基づいていることは、もっとも浅薄な観察者にも明白であるに違いない」(NC 3)。ヒュームは風土理論を批判して、国民性は精神的諸原因を大いに考慮することなしには説明できないと主張するのである。ただし、「私は人々が気候や食物や風土にその気質や天分の何かしらを負っているとは思わない」(NC 7)と述べるときには、ヒュームの主張は少々行き過ぎているかもしれない。ともあれ、私見ではヒュームの風土理論批判は概して明瞭であるように思われるし、本論の目的は個別的な議論を検討することではない。

我々が注意すべきなのは、エッセイで述べられている精神的諸原因の説が、ヒュームの主要な哲学説と独立した見解ではないという点である。アーロン・ギャレットとシルビア・セバスティアーニの研究は、問題の脚注と同年の一七五三年に『道徳原理研究』に付された「対話(A Dialogue)」の一節に注目しており有益だろう(Garrett & Sebastiani 2017, p. 32ff.)。モンテスキューの『ペルシア人の手紙』と響き合うこの「対話」の一節において、ヒュームは、諸国民間の道徳判断の大きな相違にもかかわらず、どのようにして道徳判断の一般原理を確立することができるのかを問題にしたうえで、それに地理的なアナロジーで答えている。

私は答えるが、問題をもう少し進んだところまで追究して、各国民が確立する非難や譴責の第一原理を調査することによってである。ライン川は北に流れ、ローヌ川は南に流れる。しかし両者は同じ山から湧き出し、しかも重力という同じ原理によって異なった方向へと動かされる。それらが流れる地面の異なった傾斜が、それらの進路のすべての違いを生み出す。(EPM D 26)

このアナロジーは、ヒュームが道徳判断における国民性を次のように理解していることを示している。すなわち、道徳判断は人間本性の斉一性という原理を基礎としながらも、歴史的で偶然的な経緯が人間の精神に与える影響によって、実際には多様な形で現れることになる。この現れの差異こそが道徳判断における国民性にほかならない。ヒュームは他のさまざまな国民性についても同じように理解できると考えている。

3　人種差別主義発言の哲学的核心

以上を念頭において、ヒュームの人種差別主義発言に戻ろう。問題の脚注は、次のような議論が行われている段落の最後尾に、後から付け加えられたものである。

もし人々の性格が気候や風土に基づくのであれば、暑さや寒さの度合いは有力な影響を及ぼすと自然に予想されるはずである。なぜなら、すべての植物と理性を持たない動物に対して、これほど大きな影響を及ぼすものはないからである。そして実際、南北の極圏を越えたところや南北回帰線のあいだに暮らす諸国民のすべては、人類の他の種族よりも劣っていて、人間精神のより高度な達成をなし得ないと考える理由がある。地球の北方の住人の貧困や困窮、および[逆に]必需品の少なさから来る南方の住人の怠惰は、おそらく我々が身体的原因を持ち出さずとも、この顕著な差異を説明することができる。しかしながら、これは確実なのだが、国民性は温暖な気候ではきわめて雑多であるし、また、もっと南方あるいは北方の、そうした気候のなかにいる人々について行われた一般的観察のほとんどすべては不確実で間違っている、ということが分かるのである。(NC 20)

ここでヒュームは、まず「精神的原因」を擁護する彼自身の学説にとってもっとも手強い見かけ上の反例として、「南北の極圏を越えたところや南北回帰線のあいだに暮らす諸国民」に言及する。彼らは「人類の他の種族よりも劣っていて、人間精神のより高度な達成をなし得ない」と一般に考えられている。そして、それは当地の気候が人々を劣化させたことによって説明されるべきだと考えられている。しかし、ヒュームによれば、その差異は、一方は「貧困や困窮」、他方は「必需品の少なさ」という社会的状況が、その住民たちの精神に与える影響を考慮すれば、すなわち、精神的原因について考慮すれば、「我々が身体的原因を持ち出さずとも」説明できる差異なのである(cf. Co 21)。つまり、身体的原因は必要ではない。

こう論じたうえで、ヒュームはそれほど極端ではない気候、すなわち「温暖な気候」へと話題を移す。そうした気候では、同一の気候であっても人々の国民性は「きわめて雑多」であり、気候を手がかりにその国民性を一般的に主張してみても、それはほとんどの場合「不確実で間違っている」ものとならざるを得ない。したがって、身体的原因は国民性の十分な説明にはなり得ない。ヒュームは改めてそう念を押す。

ところで、ここでヒュームが言及している「南北の極圏を越えたところや南北回帰線のあいだに暮らす諸国民」とは誰なのか。ここには解釈上のやっかいな問題があると思われる。ヒュームはこのエッセイの初出と同年の一七四八年に出版した『人間知性研究』において、別の文脈ではあるものの「ラップランド人とネグロ」(EHU 2.7)にセットで言及しており、一見するとここでも同じく彼らが念頭にあるのだと考えられるかもしれない。しかし他方で、もし「南北回帰線のあいだ」の人々にアフリカ系黒人が含まれるとすれば、一七五三―一七五四年に付け加えられた問題の脚注とのあいだに矛盾が生じてしまう。なぜなら、脚注のほうでは「ネグロ」が劣っているのは、精神的原因のためではなく、自然による「根源的な区別」のためだと言われているからである。この問題について、私自身は、ヒュームは脚注を新たに付け加えることによって黒人の扱いを「国民性について」の主要な問題圏から排除した(後述)が、同時に、精神的原因の学説がさまざまな見かけ上の反例にも対処できるという議論はそのまま残した、という解釈を作業仮説として提示しておきたい。この仮説が正しければ、一七五三―一七五四年の版において、ヒュームは黒人やその他の非白人について、彼の意見を根本的に変更したということになる。いずれにしても、脚注におけるヒュームは、良くも悪くもはっきりと彼自身の態度を示している。

問題の脚注の冒頭、ヒュームは「私はネグロと、そして一般に人間の他のすべての種族(というのは、四つか五つの異なった種類があるので)は生まれつき白人に劣っていると疑いがちである」と述べる。そして、この劣等性は「自然」が設けた「根源的な区別」だと主張する。このヒュームの説は、モンテスキューやビュフォンのような「単一発生説」ではなく「多元的発生説(polygenetic theory)」だということで、研究者たちの見解は一致している。多元的発生説とは、人類の起源に関する聖書の説明を完全なものとは認めず、人類は複数の起源を持っていると主張する思想である。それは一六世紀のパラケルルスやジョルダーノ・ブルーノに端を発し、一七世紀のアイザック・ラペイエル(Issac La Peyère)の「前アダム説(pre-Adamite theory)」に結実した。ラペイエルによれば、聖書の記述はあくまでユダヤ人についてのものであって、全世界を見渡してみればアダム以前にも人間は存在したのである(Popkin 1993a, pp. 90-92)。

ポプキンが注意するように、ヒューム哲学の一般的な特徴は、聖書の記述に対する懐疑的な態度である。たとえば、ヒュームは『人間知性研究』において、モーセ五書を「単なる人間の著者、そして歴史家の生み出したものとして」検討し、それが後代になって「未開で無知な人々」によって著されたものであり、「あらゆる国民が自国の起源について与えているような架空の説明と類似している」と判定している(EHU 10.40)。そこで、理性的に擁護できない聖書の代わりにヒュームが依拠するのはギリシア・ローマ以来の信用に足る記録資料だということになるが、そのことは彼の『イングランド史』が人間の起源という問題には踏み込まずに、カエサルのブリテン侵攻から始まることにも現れている(Popkin 1993b, pp. 255-257)。脚注におけるヒュームの暗黙の多元的発生説の保持は、聖書に基づく人間の単一発生説に対して懐疑的な、啓蒙主義時代の学問的展開と軌を一にしているのである。

しかし、ポプキンの見解は、おそらく多元的発生説的な説明はたんに独断的に付加されたものだと示唆する点で、まだ十分な説明にはなっていない(cf. Popkin 1993b, p. 266)。脚注のヒュームによれば、進んだ文明を持っているのは白人だけであり、国家のレベルでも個人のレベルでも、非白人が技芸や学問を発展させることはなかった。つまり、白人種とその他の人種のあいだには、さまざまな国々や時代を通して「斉一的で恒常的な違い」が観察できるのである。ヒュームのこの言葉遣いは、彼がここで因果論を応用しようとしていることを示唆している。因果推論のための「一般規則」(第六規則)によれば、結果の差異は原因における差異から帰結するとされていた(T 1.3.15.8)(9)。したがって、ヒュームが「かくも斉一的で恒常的な違いは、もし自然が人間たちのこうした系統のあいだに根源的な区別を設けていないとすれば、かくも多くの国々や時代にわたって起こることは、あり得なかったであろう」と言うとき、彼は一般規則に基づく因果推論を行っているのである。

さらに、ヒュームの主張の意味をはっきり理解するためには、エッセイの別の箇所を見る必要があるだろう。ヒュームはある箇所で、気候が身体ないし情念に対して影響力を持つ可能性は否定できないと譲歩を示し、しかし気候の精神ないし知性に対する影響のほうはきっぱりと否定して言う。「気候は精神や知性を左右するいっそう繊細な諸器官に作用することはできない。[…]動物の種は注意深く管理すれば、けっして退化しない。[…]しかし、有徳の人が取り柄のない子を残すかもしれないように、うわべを誇るだけの人が哲学者の父となるかもしれない」(NC 34)(10)。身体にはたしかにその人の出身の土地柄が現れるとしても、人間の精神は本来的にそうした先祖伝来の制約からもっと自由だと言うのである。我々は、この文脈でこそ、非白人は優れた精神や知性を示した試しはないという脚注の発言を思い起こすべきである。この発言が意味するのは――ヒュームの議論と発言の含意をあえて明示してしまえば――非白人は白人と同じ人間本性を持たないということにほかならない(12)。これこそがヒュームの人種差別主義思想の核心である。

この論点は、ヒュームの因果論と深く結びついているだけでなく、「国民性について」の主題ともきわめて密接な関係にある(13)。このエッセイの趣旨は、人間の精神は一般にきわめて柔軟であり、身近な人々とのコミュニケーションと共感を通じて、すなわち「精神的原因」に影響されて変容するということである。ヒュームによれば、それこそが多様な国民性の生じる主要な原因である。

> 人間精神は非常に模倣的な本性を持ち、どんな人々の集団であれしばしば一緒に会話をしながら、生活様式にある類似性を獲得したり、彼らの美徳だけでなく悪徳までもお互いに伝達したりしないでいることは不可能である。仲間と社交を求める性向はすべての理性的な被造物において強力であり、この性向を我々に与えるのと同じ気質が、それぞれ他人の気持ちに我々を深く入り込ませ、仲間たちのクラブや集団全体を通して、いわば感染によって同じような情念や性向を生じさせるのである。(NC 9)

これはヒュームの人間本性についての思想のなかでもっとも優れた部分の一つであると私には思われる。皮肉なのは、この論点を踏まえて初めて、脚注のヒュームの議論が十分に理解できるということである。すなわち、もし「国民性について」におけるヒュームの主張が正しく、かつ、もし黒人が白人と同様の人間本性を持っていたとすれば、ヨーロッパに連れて来られて白人たちに交わっている「ネグロの奴隷たち」に、「創意工夫の兆し」さえ見られず、また「あらゆる職業で頭角を表す」ということもないということは説明できない。脚注のヒュームは、この一種のモードゥス・トレンスによって、とりわけ黒人は「生まれつき(naturally)白人に劣っている」と考えるのは正当だと主張するに至っている。ここには哲学的な論証があるのである。

4　ヒュームに対する批判をめぐって

我々はヒュームのこうした主張と議論をどう評価できるだろうか。もちろんすでに述べたように、時代的な限界はよく吟味される必要がある。たとえば、すでに見た評論で、バジーニは次のようにヒュームを擁護しようと試みている。

> ヒュームとてその時代の産物であって、いつの時代の人もそうであるように、彼にも盲点があった。彼の経験主義と懐疑主義は、彼に白人のほうが優れていると自信を持って断言(assert)するのを控えさせ、白人のほうが優れているのではないかと「疑わ(suspect)」せることになった[…]。(Baggini 2020)

しかし、この主張は適切に事実を反映していない。じつは当時からヒュームの人種差別主義に対してはかなり強力な反論が存在していた。我々が注目しなければならないのは、その

反論の内容である(cf. Sebastiani 2013, Ch. 4; Popkin 1993b, Popkin 1991; Garrett & Sebastiani 2017, pp. 39-41)。まず、ビーティーのまったく容赦のない批判を見よう。

> ビーティーは一七七〇年に『真理の本性と不変性についての試論』を著したが、そこでヒュームの「白人の黒人に対する優位性」の主張についても激しく非難し、キリスト教の人道主義の立場から「人間の自然で普遍的な自由への権利」を擁護している(Beattie 1805, p. 308ff)。ちなみに、これはアバディーンのワイズクラブ(the Aberdeen Philosophical Society, known as the "Wise Club")で行われた一連の会合の成果の一つである。私なりに整理し直すと、ビーティーの批判は次のような二種類の議論が組み合わされたものである。その第一の種類の議論は、(1)ヒュームの主張は重要な点で経験的証拠が不足しているか、あるいは経験的証拠に反しているというものである。(1a)二〇〇〇年前のブリテンやフランスも、現在のアフリカやアメリカのように「野蛮な」「幼児」の段階にあった。アフリカやアメリカの国民が長い時間をかけても「文明化された」「大人」になれないという理由はない。(1b)ヒュームの言うような一般的主張を正しくするためには、「地球上にいま存在し、かつて存在したすべてのネグロ」を実際に調査する必要がある(14)。(1c)ペルーやメキシコの帝国を築いた人々は「行為においても思弁においても優れていた」に違いなく、また、アフリカやアメリカにはヨーロッパ人でも容易に真似できない工芸・芸術がある。(1d)ヨーロッパに散らばる奴隷たちは、職人や音楽家として才能の片鱗を示している(15)。また、主人が苦労して教えたことは何でも習得するし、ヨーロッパ人のように堕落することすら教わる。
>
> もう一つの種類の議論は、(2)非白人の「野蛮」な現状についてもヒュームとは別の説明が可能だという論点を突くものである。(2a)「ヨーロッパ人も筆記や鉄工の技術を欠いていたとすれば、今日に至るまでアフリカやアメリカの原住民と同様の野蛮状態に留まっていたかもしれない」。彼ら原住民たちはたしかに学問を持たないが、それは文字を持っていないからである。他方、筆記や鉄工の発明はより優れた能力に帰されるべきではなく、むしろ偶然の発見に恵まれるかどうかの違いであろう。(2b)たしかに奴隷たちはヨーロッパの言語を読んだり書いたり、そして話したりもできない。しかし、彼らが置かれている逆境をさまざま考慮すれば、それは十分に理解できることである。「[奴隷の]彼がこのように目立った業績をあげないからといって、彼を劣った種の一員だと想定するのが合理的だとすれば、ヨーロッパの一個人が王族の地位に登り詰めないからといって、彼を劣った種の一員だと想定するのも同じくらい合理的である」。(2c)野蛮とは文化相対的な概念である。ヨーロッパ人から見て野蛮な人々のなかに、もしヴォルテールやルキアノスのような文筆家がいて自然誌を書いたとすれば、ヨーロッパ人の行為の数々も「知性を欠いた野蛮さの見本」と揶揄されたことであろう。
>
> いや、ヒュームにはさらに切実な批判が寄せられていた。

問題の脚注の最後で、ヒュームはその才能と教養を称賛されているというジャマイカの「ネグロ」を取り上げている。そして、彼を「オウム」に喩える侮辱的な表現でその人物の知的創造性を否定し、その存在がヒュームの持論の反証となる可能性を却下する。ヒューム自身は明示的に名前を挙げていないこの人物は、フランシス・ウィリアムズという一六九七年生まれのジャマイカの自由黒人である。彼はラテン詩を書くということで当時よく知られており、アフリカ系の人々の「劣等性」に関する議論の無視できない対象であった(16)。重要なのは、ウィリアムズ自身がヒュームのこの発言に対して公に抗議していたという事実である。ポプキンによれば、「ウィリアムズのヒュームに対する応答は、そして、彼がヒュームの人種差別主義への生きた反証であることは、ヒュームの時代のイギリスの学界では広く知られていた」(Popkin 1991, p. 71)(17)。

かくして、ヒュームは、ビーティーを始めとしたアバディーンの学者たちの批判や、ウィリアムズの抗議など、その事実を確かめることができたはずの反証事例に対して、固く目を閉ざしたままでいることを選び、持論の人種差別主義的な主張を維持し続けたのである(18)。ヒュームを手厳しく批判してポプキンは言う――「私が思うに、我々は(a)ヒュームはお粗末な経験主義的研究者であった、そして(b)彼は不誠実な研究者であって、それと知りながら彼の知見を非人道的な目的に用いることを許したのだ、と結論することができる」(Popkin 1991, pp. 73-74)。脚注のヒュームに対する評価としては、ポプキンの判決を否定する材料は見当たらない。残念ながら、ヒュームは有罪だと言わざるを得ないだろう。

しかし同時に、勢い余って(ポプキンはしばしばそう示唆しているようにも見えるのだが)ヒュームが常に偏見に屈してしまう三流の「思想家」だったと考えてしまうと、かえってヒュームの人種差別主義の持つ問題の所在を見逃してしまう(cf. Popkin 1991, p. 74)。たとえば、ポプキンは『人間本性論』のある箇所へ言及して「ヒュームはアイルランド人に関する偏見があった」と論じる(Popkin 1991, p. 65)。しかし実際には、ヒュームはその箇所で、アイルランド人への当時の偏見を引き合いに出しながら、偏見の原因と対処法について論じているのである(T 1.3.13.7-12)(19)。そして、これは、ヒュームの哲学理論と実践とは、もし彼に偏見がある場合には簡単に乖離してしまうのだという話でもない。かつて坂本が明瞭な筆致で示したように、ヒュームはセント・クレア将軍の付き人としてヨーロッパ旅行を体験した際、彼自身のブリテン的偏見のなかで後進国として想念されていたドイツに対する見方を訂正し、それを自己批判へ結びつけることができる人物であった。そして、ヒュームはドイツの想定外の繁栄を可能にしている諸条件を分析することを通して、彼の文明社会論を形成してゆく。つまり、ヒュームが近代経済学の創始者の一人となり得たのは、彼が一流の経験主義者であったからにほかならない(坂本一九八五、第三章)。

したがって、我々はむしろ次のような問いを立てる必要があるだろう。なぜヒュームはその優れた洞察力を彼の人種的偏見については発揮できなかったのか。もちろん、すぐに出てくる解答の一つは、ヒュームの人種差別主義はひときわ強力なものだったというものだろう。しかし、話はそれで終わりなのだろうか――。

ヒュームの人種差別主義がどこから来たのかという論点については、植民地政策との関係がどの程度あったかなど、さまざまな観点から検討できると思われる。本論では理論的な関心からフレドリクソンの見解に注目しよう。フレドリクソンは、西洋中世から現代までの人種差別主義の歴史を簡潔に記述した著作で、きわめて興味深い見解を表明している。すなわち、「西洋において特徴的なのは、平等という前提と、特定の集団への強力な偏見――イデオロギーないし世界観としての人種差別主義が大きく開花するための前提条件だと思われる偏見――とのあいだに、弁証法的な相互作用が見いだされるということである」(Fredrickson 2002, p. 12)。じつは、フレドリクソンのこの一般的観察が、ヒュームの事例を理解するための鍵である。

すでに確認したことだが、エッセイ「国民性について」は、国民性の差異に関する風土理論を退けて、それを精神的原因によって、とくに歴史的・社会的に形成される生活様式への共感と感染によって説明するものである。ここで改めて重要なのは、ヒュームの説明において、国民性は固定的な実体や本質を持つものではなく、きわめて短期間のうちに――とりわけ単一発生説が想定するよりも遥かに短いうちに――変容し得る偶然的属性として理解されている点である。たとえば、ヒュームは、飲酒癖を北方の寒冷な気候が人々の体質に影響した結果として説明する風土理論に徹底的に対抗して、次のように主張している。「アレクサンダーがギリシア人たちをペルシア、さらに南方の気候に先導したとき、彼らは、ペルシアの様式を模倣して[飲酒という]彼らの放蕩を倍増させたのであった」(NC 32)。『人間本性論』のヒュームは、これと同様な知見を少なくともその背景として、アイルランド人は機知を欠いているという当時の偏見の一つを批判できたと考えられるのである。

そうだとすれば、むしろ興味深いのは、国民性についてのこの非実体的な理論こそが、ヒュームをして白人と非白人(とりわけ黒人)との差異を、今度は不当にも人間本性という本質主義的な水準で実体化させしまった一因だと考えられる、という点である。ビーティーの批判が示すように、この件では理論の証拠となるはずの観察自体が、すでにヒュームの人種的偏見に少なからず汚染されていた。そして、白人の領域において平等主義的な人間本性についての理論は、彼のそうした偏見と結合したとき、その外側の非白人の領域について、きわめて排他的に作用することになったのである。ヒュームによれば、黒人奴隷たちはヨーロッパで進んだ文明に十分に触れているはずであるのに、彼らのなかに「これまで創意工

夫の兆しを示した者は誰もいない」。このような事態は、ヒュームにとって、人間の可塑性を強調する彼の国民性論ではまったく説明が困難だった。少なくとも、彼はそう信じたいと思えば信じることができた。それゆえ、ヒュームは彼の持つ人種的な偏見を人間本性というもっとも根源的なレベルでより強化するという悪循環に陥った。要するに、ヒュームの場合、啓蒙主義的な世俗的平等の観念の発達と、非白人に対する本質主義的な差別主義とのあいだに、フレドリクソンの言う弁証法的相互作用を認めることができると思われる。彼の人間本性に関する理論が彼の偏見にまことしやかな正当化を与え、その理論的正当化は彼の偏見に本質主義的な差別主義の形態を採らせることになったのである。

実際、以上のような事情を踏まえれば、ヒュームのすぐ後の世代の人々が多元発生説の論駁を試みる際、多元発生説を支持しているはずのヒュームの「国民性について」の議論を存分に活用している(Sebastiani 2013, e.g. p.119)という思想史的パラドックスも、まったく不思議なものではなくなるだろう。後世から見れば、しばしば決定的に見える人々の知性的差異は――実際には白人と非白人のあいだの差異も含めて――ヒュームが考えたように歴史的に形成されてきたと考えるべきだったというわけである。たとえば、ヒュームにとって本質的だと思われた黒人奴隷の劣等性についてすら、ヒューム自身が「技芸と学問の生成と発展について」のなかで、(「君主制(monarchy)」と区別された)「専制(despotism)」について述べた一節が示唆的である。

> 彼[「野蛮な君主」]は、彼の被治者を、あたかも彼自身の持ち物であるかのように完全な権威でもって、また、他人の持ち物のように無頓着と暴虐でもって、統治するのである。民衆はこのように支配されるならば、言葉の完全かつ本来の意味において奴隷である。そして、彼らが趣味や理性の洗練をおよそ渇望し得ることは不可能である。彼らは生活の必需品を豊富に、あるいは安全に、享受することを主張しようとすらしないのである。(RP 11)

もちろん、ヒューム自身がこうした見方を黒人奴隷の現状に対しては適用しなかったという事実に、かえって根深い彼の差別意識を見てとることができる。しかし同時に、「国民性について」を始めとしたヒュームのいくつかのエッセイが、むしろ諸国民の差異を非本質主義的に理解するための理論を展開するものであり、まさにその点で人種に関する後世の理論の展開に寄与した、という側面があることも見逃されてはならない。

おわりに

ヒュームに人種差別主義的な発言が存在するということは、私も以前から知っていた。しかし、少し時間をとって検討してみようと思ったのは、冒頭でも述べたようにBLMの再燃

とエディンバラ大学の騒動が起こったからである。そして、『人間本性論』が非白人を含む我々についての哲学だということを疑ったことがなかった私は、すぐにヒュームの発言の内容にショックを受けることになった。ヒュームの人種差別的な発言が、白人至上主義的な価値観の素朴な表明にとどまらず、人間本性という水準で白人と非白人のあいだに理論的な線引きを行うものだったと確認したからである。こうした見解は、もちろん当時はヒュームに限られたものではまったくないが、普遍的だったわけでもない。そうだとすればなおさら、我々は白人至上主義や人種差別主義の哲学者から何を学ぶか、そしていかに学ぶかということについて考える必要があるだろう。これは非常に難しい問題であり、今ここで完璧な解答を出すことはできない。

しかし最後に、ここまでの検討から明らかになった中心的な問題には、少し反省を付け加えておくべきだろう。本論が明らかにしたのは、脚注の一つに現れたに過ぎないようにも見えるヒュームの人種差別主義的な発言が、実際には彼の哲学の根幹に位置する「人間本性」という概念と不可分に結びついているということである。このことは、そもそも人間本性という発想自体が、特定の本質を共有する「我々」人間と、それを共有しない「他者」との区別を作り出し、その「他者」をけっして「我々」のような人間になり得ないものとして「外部」へと排除する概念装置でもあったという点を再確認させてくれる。では、ヒューム哲学が持つこうした危ういい側面について、我々はどう考えればよいのだろうか。

もっともラディカルな対応は、言うまでもなく、人間本性という概念そのものの破棄、したがってヒュームの哲学体系の全面的破棄を要求するという方針だろう。逆に、もっとも保守的な方針としては、すでに上でも示唆されたように、ヒュームが考えたような人間本性の概念は堅持しつつ、それを適用すべき外延を正しく見極めればよいという選択肢が考えられる。あるいは、また少し別の方針として、人間本性の価値を特権化せずに、さまざまな性質にさまざまな価値を認めることによって、「我々」と「他者」は区別しつつ、その区別と価値の高低との連結を切断するべきだと考える人などもいるかもしれない。もちろん他にもあるだろう。

私自身がいま暫定的に考えているのは、人間本性という概念の中身をアップデートしようという方向性である。たとえば、犬がどうやっても直立二足歩行ができず、言葉を話せないことからも分かるように、人間に特有な性質、あるいは少なくとも典型的な性質が存在するという考え方を維持することはできるだろう。いやむしろ、私はこうした意味での人間本性という概念なしでやっていくことを想像できない。ただし、とくに以下の二点に注意する必要がある。

第一に、何か一つの、または少数の、特権的な性質が「人間」の必要十分条件を構成すると考えるべきではない。ヒュームは啓蒙主義時代の思想家のなかで進化論的な発想にもっとも接近した人物だと思われるが(cf. DNR 8.2-8; DNR 5.7-8)、

それでも人間本性という彼の中心概念を本質主義の軛から解放するには至らなかった。それは彼が多元的起源説を採用したであろうことと連動している。しかし、すでに進化論を知る我々は、人間本性という概念をもはや時代遅れの本質主義な発想から切り離さなければならない(cf. Dennett 1995, Ch. 2; Dennett 2017)。概して言えば、人間本性は(ウィトゲンシュタインの「家族的類似性」のように)さまざまな性質のクラスターとして理解され直すべきである(cf. Wittgenstein 2009, §§ 65-67)。たとえば、ある人が自立できず歩けず言葉を話せないからといって、すぐに人間ではないということにはならない。また、たとえば犬と人間はたしかに区別されるのであるが、犬と人間はきわめて多くの重要な性質を共有していることに注目できる。あえて逆説的な言い方をすれば、犬も人間本性の一部を分け持つと考えられるのである。それゆえ、もし犬が痛みを感じるとすれば、犬は言語を持たないからといって、すぐに蹴り飛ばしてよいということにはならないだろう。

とはいえ、この点に関しては、さらに次のことに留意しなければならない。ヒュームの差別主義を構成するのは、自分たち白人のそれこそが他を優越していると彼が考える諸性質に高い価値を与えたこと、および、他者たる非白人はそうした性質を持たないという懐疑主義者にふさわしからぬ独断論、これら大きく二つの要素だと考えられる。しかし、少し反省してみれば分かるように、いま述べているような考え方も、我々人間が持つ我々にとって重要な諸性質に価値を置いているという意味では、じつはヒュームが自民族中心主義的であったのと同様に、根本的に人間中心主義的である(そして実際、我々は一般に人の命を犬の命に優先させており、それにもかかわらず、進化論を始めとした自然主義的な世界観を採る限り、こうした選好の正当性をそこから引き出すのは難しいことに注意しよう)。それゆえ、このような考え方は、今度は人種差別ならぬ種差別(speciesism)の危険と常に隣り合わせである。しかしながら、このことは、このような考え方に対する帰謬法的な論駁になっているというよりも、我々が悪しき差別主義に転落する危険性に常に向き合って生きていかざるを得ないことを示すものではないだろうか。もしそうだとすれば、現代の我々にしても、ヒュームが判断を誤った問題に対して、何か原理的な解決法を獲得したというわけではないのである。我々としても、「他者」に対して自らの優越を過信しすぎることのないように、常に自戒し続けなければならない。

第二に、他の動物には見られないと思われる人間に特徴的な性質として、きわめて大きな可塑性を持つということが知られている。これはヒューム自身も強調する重要な論点だったわけであるが、いわば人間本性に由来する諸性質それ自体が流動的なことこそが人間本性の興味深い特徴の一つである。人間らしいとされる我々の思考や行動は、たしかに生物学的に基礎づけられているが、同時に生育環境の影響を受けて大きく変動し得る。しかも、我々を取り囲んでいる環境の大部分を形作っているのは、意識的かつ無意識的な改変を加えな

がら、我々が先祖から引き継いできた文化である(20)。そうだとすれば、我々にとって「他者」――歴史と文化を異にする人々――がどれほど異質に見えようとも、そこにアプリオリで本質的な差異を想定して排除してかかるのは、きわめて不合理な施策だということになるはずである。そして、これはヒュームが彼の哲学に依拠して進むことができたはずの道である。残念なことに、実際のヒュームがこの方向に思考を展開させることはなく、彼は人間本性についての理論を人種差別の正当化に用いることになった。我々はこの事例を苦い教訓とするべきである。

我々がこのように歴史や文化の決定的な重要性を認める人間本性の見方を真剣に採るとすれば、社会生物学の知見を安易に人間に適用することは間違いとなる。もちろん、私は人間の持つ諸性質について無制約な社会構成主義を採るつもりもない。いや、むしろどちらも部分的に正しいと言うべきだろう。我々に必要なのは、我々がどこまで生物学的に制約されていて、どこから我々の自律的な選択が開かれているのかを慎重に見極めるための、経験的かつ概念的な研究である。もちろん人間の持つどのような特性が、我々の高度な文化を可能にしているのかを探究することも、また不可欠である。例の地理的な比喩を思い出せばすぐに分かるように、これこそがヒュームの「人間の学」の中心課題だったものにほかならない。人間本性を探究することは、その学術的・社会的な意義を失うことはないだろう。実際的にも、人種概念を形成する心理的メカニズムを解明する経験的研究が、人種差別主義への有効な対抗手段を提供してくれる可能性が指摘されている(Heath 2014, Ch. 13; cf. Faucher 2017)。

我々は、過度に恐れることなく、しかしもちろん慎重に、人間本性とは具体的に言ってどのようなものなのかを問う探究を、これからも継続するべきだろう。我々はヒュームの事例において、我々が確かに受け取るべき厳しい警告と、見失うべきではない希望の光とを見出すことができるのである(21)。

(1) "Equality, Diversity and Inclusion - an update," 15 Sep 2020. Accessed 2 Sep 2021: https://www.ed.ac.uk/news/students/2020/equality-diversity-and-inclusion-an-update.

(2) "Rename David Hume Tower at UoE." Accessed 2 Sep 2021: https://www.change.org/p/university-of-edinburgh-rename-david-hume-tower-at-uoe.

(3) 黒人を「ネグロ(Negro)」と呼ぶのは、その歴史的経緯から現代では侮辱的表現だと理解されているが、本論では学術的な観点から引用においてはオリジナルの表現を保存する。

(4) 『道徳・政治・文学論集』に収められた各エッセイからの引用は、以下の略号を用いて表記し、必要に応じて段落番号を指示する。

NC: "Of National Characters"(「国民性について」)

Co: "Of Commerce"(「商業について」)

PA: "Of the Populousness of Ancient Nations"(「古代諸国民

の人口について』)

RP: "Of the Rise and Progress of the Arts and Sciences" (「技芸と学問の生成発展について」)

その他の著作からの引用も慣例に倣う。『人間本性論』は T と略記し、巻・部・節・段落を示す。『人間知性研究』および『道徳原理研究』は、それぞれ EHU および EPM と略記し、節・段落を示す。『自然宗教に関する対話』は、DNR と略記し、部・段落を示す。

(5) ただし、Immerwahr (1992) の主張には事実に関する誤りも多く、Garrett (2000) の批判を合わせて参照する必要がある。

(6) Popkin (1993b, p. 260) が引用する原文に基づき拙訳で示した。元の出典は David Hume, "Le Caractère de Nations," in *Essais moraux et politiques*, 2nd ed., trans J. H. Schneider (Amsterdam 1764), 434tn である。

(7) しかし、ヒューム自身は、おそらく学術的見解に留まるものだったとはいえ、別のエッセイで奴隷制にはっきりと反対している(PA)。この論点については Sebastiani (2013, Ch. 4) を参照されたい。

(8) この点について私の念頭にあることの一つは、一七六四年生まれのスコットランドの探検家、アレクサンダー・マッケンジーの事例について、ハッキングが提出したニュアンスのある意見である。ハッキングによれば、彼は人種差別主義者であった(Hacking 1999, pp. 155-156)。

(9) ただし、坂本はヒュームが『法の精神』に触れたことによって「国民性について」を書くことになったというような見解については慎重になるべきだと論じている(坂本一九八五、第三章)。同じく、このエッセイが『法の精神』への直接的な応答だという証拠はないという点については、Sebastiani (2013, p. 28) も参照されたい。

(10) 因果推論の第六規則の適用については、「技芸と学問の生成・発展について」においても見ることができる(RP 1-5)。ヒューム自身の説明はそちらのほうが詳しい。

(11) ギャレットとセバスティアーニは、この箇所について、ヒュームは種的な特性と環境による特性との区別を議論していると解釈しているが、その読みはヒュームの論点を少し外しているのではないかと思う(Garrett & Sebastiani 2017, p. 36)。

(12) 本論は人種の問題を集中的に取り上げているが、ジェンダーという側面からも同様の疑念が問題になる可能性を指摘しておかなければならない。ヒュームは『道徳原理研究』の一節(EPM 3.19)で、女性、アメリカ・インディアン、そして動物に関する彼の見解を提示している。この論点については、セバスティアーニの議論を参照されたい(Sebastiani 2013, pp. 37-8)。

(13) 脚注の人種差別主義的な主張は、ヒュームが彼の精神の理論によって、黒人には「哲学的関係」に基づく反省的思考ができないと考えたことによるという解釈がある(Eze 2000)。たしかに、ヒュームがそのように考えていた可能性を否定する材料はないかもしれない。しかし、彼の解釈は、問題の脚注との連関がはっきりとは辿れないテキストから、いくつか推測を重ねて得られるようなものである。むしろ我々はより直接的な繋がりが見て取れる論点に注意するべきだろう。以下で示すように、感情や同情と対比された反省的理性の能力が問題の焦点だという彼の示唆は誤解を招く。

(14) ただし、ヒュームの認識論を踏まえると、この反論はかなり言いがかりに近いだろう(cf. 澤田二〇二一、第二章・第三章)。

(15) ビーティーですらこの点では当時の偏見に絡め取られているという意見があるだろう。おそらくはそのとおりであり、我々は問題の難しさを感じ取るべきかもしれない。

(16) この説明は基本的に Garretta (2003) に負う。他に Popkin (1991), Sebastiani (2013, Ch. 4) も参照されたい。なお、本論の文脈では、フランシスが解放奴隷だった父ジョンから相続した遺産には黒人奴隷も含まれていた、という人種と社会的地位の複雑な事情に触れておくべきかもしれない。「フランシス・ウィリアムズが奴隷の全般的解放の支持者であったり、奴隷貿易の反対者であったりした証拠はないにもかかわらず、彼に対する刊行された複数の攻撃は、自由民に生まれた黒人詩人が人種差別主義のイデオロギーにもたらす脅威を反映していた」(Garretta 2003, p. 224)。

(17) ポプキンは、Henry Louis Gates Jr. の博士論文を参照しているが、その論文は残念ながら入手できなかった。

(18) とくにウィリアムズの抗議については、認識的不正義の歴史的事例——とくに「アイデンティティに関する偏見に基づく信頼性の欠損(identity-prejudicial credibility deficit)」の事例——として議論することもできるかもしれない(cf. Fricker 2007, p. 28)。また、西内(二〇二一)は有益なサーベイの末尾で、ヒュームがウィリアムズのラテン詩の芸術的価値を正当に評価し得たかという問題を、ヒューム自身の趣味論の観点から検討している。これは哲学的には興味深い問題であるが、その問題設定がヒュームの差別的な発言の問題を矮小化してしまう可能性については注意が必要だろう。「オウム」という比喩は、ウィリアムズがラテン詩を創作したという事実をヒュームが正当に評価しようとしなかったことを示唆する。

(19) 澤田(二〇二一、第二章)を参照されたい。関連する論点として「国民性について」の冒頭の論述がある(NC 1)。この箇所についても、ヒュームが自らの偏見を無反省に擁護していると読むのは一面的だろう。たとえば、ステレオタイプな判断が不可避である(あるいは望ましい)場合があるというフリッカーの議論を念頭においたうえで(Fricker 2007, p. 32)、ヒュームの議論の主題が「国民性」の解明であることを思い出すべきである。

(20) 人間についての自然科学的な探究に好意的な哲学者たちの間でも、文化の圧倒的な重要性はますます強調されるようになってきている(Prinz 2013)。とくに人間進化に特有の事情として、その生物学的基盤すら文化の影響で進化してきたという事実があるようである(Henrich 2017)。再び逆説的に言えば、人間は人為によって自らの進化を自然に引き起こす生物らしい。

(21) 本論は JSPS 科研費 20J01095 による研究成果の一部である。この課題に取り組むように励まし、時宜を捉えて助言を与えてくださった出口康夫先生にまずは感謝したい。論文百万遍クラブのメンバーにも執筆途中の草稿を検討してもらった。また、完成一歩手前の原稿は、日本イギリス哲学会・第六四回関西部会例会で発表された。忌憚なく意見や質問を寄せてくださった方々に改めてお礼を申し上げる。

文献

ヒュームの著作

Hume, David (2000 [1739-40]) *A Treatise of Human Nature*,

David Fate Norton & Mary J. Norton (eds.), Oxford University Press.（『人間本性論』（全三巻）、木曾好能・石川徹・伊勢俊彦ほか訳、法政大学出版局、一九九五年・二〇一一年・二〇一二年）

——— (1999 [1741]) *An Enquiry concerning Human Understanding*, Tom L. Beauchamp (ed.), Oxford University Press.（『人間知性研究』、神野慧一郎・中才敏郎訳、京都大学学術出版会、二〇一八年）

——— 1985 [1741]) *Essays, Moral, Political, and Literary*, Eugene F. Miller (ed.), Liberty.（『道徳・政治・文学論集 完全版』、田中敏弘訳、名古屋大学出版会、二〇一一年）

——— (1998 [1751]) *An Enquiry concerning Principles of Morals*, Tom L. Beauchamp (ed.), Oxford University Press.（『道徳原理の研究』、渡部峻明訳、哲書房、一九九三年）

——— (1993) *Dialogues and Natural History of Religion*, J. C. A. Gaskin (ed.), Oxford University Press.（『自然宗教をめぐる対話』、犬塚元訳、岩波文庫、二〇二〇年）

その他の著作

Baggini, Julian (2020) "Is the University of Edinburgh right to "cancel" David Hume?" *Prospect*, 15 September 2020. Accessed 2 Sep 2021: https://www.prospectmagazine.co.uk/philosophy/edinburgh-university-cancel-david-hume-rename-building.

Beattie, James (1805 [1770]) *An Essay on the Nature and Immutability of Truth, in Opposition to Sophistry and Scepticism*, Sixth Edition, Denham & Dick.

Buffon, Georges-Louis L. (1749) *Histoire Naturelle Générale et Particuliére*, vol. 3, Paris: L'Imprimerie Royale.

Dennett, Daniel C. (1995) *Darwin's Dangerous Idea: Evolution and the Meanings of Life*, Penguin Books.

——— (2017) "Darwin and the Overdue Demise of Essentialism," in David Livingstone Smith (ed.), *How Biology Shapes Philosophy: New Foundations for Naturalism*, Cambridge University Press, pp. 9–22.

Eze, Emmanuel Chukwudi (2000) "Hume, Race, and Human Nature." *Journal of the History of Ideas*, 61, 4: 691–698.

Faucher, Luc (2017) "Biophilosophy for Race," in David Livingstone Smith (ed.), *How Biology Shapes Philosophy: New Foundations for Naturalism*, Cambridge University Press, pp. 247–275.

Fredrickson, George M. (2002) *Racism: A Short History*, Princeton University Press.（ジョージ・M・フレドリクソン『人種主義の歴史』、新装版、李孝徳訳、みすず書房、二〇一八年）

Fricker, Miranda (2007) *Epistemic Injustice: Power & Ethics of Knowing*, Oxford University Press.

Garrett, Aaron (2000) "Hume's Revised Racism Revisited," *Hume Studies*, 26, 1: 171–177.

Garrett, Aaron & Sebastiani, Silvia (2017) "David Hume on Race," Naomi Zack (ed.), *The Oxford Handbook of Philosophy and Race*, pp. 30–43.

Garretta, Vincent (2003) "Who Was Francis Williams?" *Early American Literature*, 38, 2: 213–237.

Hacking, Ian (1999) *The Social Construction of What?* Harvard University Press.（イアン・ハッキング『何が社会的に構成されるのか』、出口康夫・久米暁訳、岩波書店、二〇〇六年）

Heath, Joseph (2014) *Enlightenment 2.0: Restoring Sanity to Our Politics, Our Economy, and Our Lives*, HarperCollins.（ジョセフ・ヒース『啓蒙思想2.0——政治・経済・生活に正気を取り戻すために』、栗原百代訳、NTT出版、二〇一四年）

Henrich, Joseph (2017) *The Secret of Our Success: How Culture Is Driving Human Evolution, Domesticating Our Species, and Making Us Smarter*, Princeton University Press.（ジョセフ・ヘンリック『文化がヒトを進化させた——人類の繁栄と〈文化-遺伝子革命〉』、今西康子、白揚社、二〇一九年）

Immerwhar, John (1992) "Hume's Revised Racism," *Journal of the History of Ideas*, 53, 3: 481–486.

Jordan, Winthrop D. (2012 [1969]) *White Over Black: American Attitudes Toward the Negro, 1550–1812*, The University of North Carolina Press.

カント、イマニュエル（二〇〇〇[1764]）「美と崇高の感情にかんする観察」、久保光志訳、『カント全集——前批判期論集Ⅱ』、岩波書店。

Learmonth, Andrew (2020) "Edinburgh University 'cancels' David Hume after Black Lives Matter protests," *The National*, 13th September 2020. Accessed 2 Sep 2021: https://www.thenational.scot/news/18717667.edinburgh-university-accused-cancelling-scottish-enlightenment-philosopher-david-hume-following-black-life-matter-protests.

西内亮平（二〇二一）「ヒュームと人種主義」、『人間存在論』第二七号、六一—七四頁。

Rattansi, Ali (2020) *Racism: A Very Short Introduction*, Second Edition, Oxford University Press.

Prinz, Jasse (2013) *Beyond Human Nature*, Penguin Books.

Popkin, Richard H. (1993a [1974]) "Philosophical Basis of Modern Racism," Reprinted in Richard A. Watson & James E. Force (eds.) *The High Road to Pyrrhonism*, Hackett, pp. 79–102.

——— (1993b [1977–8]) "Hume's Racism," Reprinted in Richard A. Watson & James E. Force (Eds.) *The High Road to Pyrrhonism*, Hackett, pp. 251–266.

——— (1991) "Hume's Racism Reconsidered," in *The Third Force in Seventeenth-Century Thought*, Brill, pp. 64–75.

坂本達哉（二九八五）『ヒュームの文明社会——勤労・知識・自由』、創文社。

澤田和彦（二〇二一）『ヒュームの自然主義と懐疑主義——統合的解釈の試み』、勁草書房。

Sebastiani, Silvia (2013) *The Scottish Enlightenment: Race, Gender, and the Limits of Progress*, Palgrave Macmillan.

Wittgenstein, Ludwig (2009) *Philosophical Investigations*, Fourth Edition, P. M. S. Hacker & Joachim Schulte (eds.), Wiley-Blackwell.（L・ウィトゲンシュタイン『哲学探究』、鬼界彰夫訳、講談社、二〇二〇年）